

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 85 2022年7月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

http://nofence.jp/



東亜日報 日本語版記事より 2022.7.11

国連、北朝鮮人権状況特別報告者にサルモン氏任命

Posted July. 11, 2022 08:53, Updated July. 11, 2022 08:53

国連人権理事会は8日、ローマ教皇庁立ペルー・カトリック大学の「民主主義と人権問題研究所」所長のエリザベス・サルモン氏（56・写真）を北朝鮮人権状況特別報告者に任命した。来月1日に退任するトマス・オヘア・キンタナ氏の後任となるサルモン氏は、北朝鮮人権状況を調査して改善案を求めることになる。任期は1年で、6年まで延長可能だ。



北朝鮮に対する国際社会の人道支援の規模は10年前の100分の1水準に減少したことがわかった。国連人権問題調整事務所（OCHA）の資金追跡サービス（FTS）によると、10日基準、今年北朝鮮に支援金を送った国はスイス、スウェーデンだけで、計153万1567ドル（約19億9千万ウォン）規模だった。北朝鮮の金正恩（キム・ジョンウン）総書記の執権初年度である2012年の1億1779万ドルの1.3%だ。

キム・スヒョン記者 news00@donga.com

以下 サルモン氏について お名前前の英文表記と彼女についての情報を確認する二つの資料を紹介します。GPF (Global Peace Foundation) の澤村健ニル (在米) の提供です。一つは、連合ニュース(英文)と彼女が勤務する大学の彼女の紹介記事の一部です (日本語自動翻訳)。

サロモン

連合 (Yonah) ニュース (原史)

Elizabeth Salmon, director of the Institute for Democracy and Human Rights of the Pontifical Catholic University of Peru, was appointed as the new rapporteur during the 50th session of the U.N. Human Rights Council held Friday (U.S. time). Her one-year term begins on Aug. 1 and can be extended for up to six years.

Salmón is currently a professor of international law at the Pontifical Catholic University of Peru, where she serves as executive director of the Institute for Democracy and Human Rights, and is also chair of the Advisory Committee to the U.N. Human Rights Council.

耶夫 委員

ローマ教皇立カトリック大学 (PUCP) のホームページ (日経新聞 2004年8月)

<https://idehpucp.pucp.edu.pe>

セビリア大学で国際法の博士号を取得し、ペルー教皇立カトリック大学(PUCP)で国際法の上級講師を務める。彼女はPUCPの民主主義と人権研究所(IDEHPUCP)の事務局長です。彼女は国連人権理事会の諮問委員会に座っています。彼女はまた、コロンビアの平和のための特別管轄権(JEP)でアマカス・キュリアエとして行動する外国の専門家法学者です。国際公法、国際人権法、国際刑事法、国際人道法、移行期正義に関するいくつかの出版物の著者。PUCPの人権修士号のディレクター、ペルーの司法省と国防省のコンサルタント、ペルーの真実と和解委員会、国連、赤十字国際委員会のコンサルタントを務めました。また、様々な大学や専門コースの客員教授も務めています。



The Radio Free Asia (RFA) より



上記 PUCP より

<編集部付記> 今回の(国連人権理事会の)北朝鮮人権状況特別報告者 2004年～
初代 エンターゴーン(91), 2代目 ダリス(11年7月), 3代目 キンタ(7月20日)
南米から連続して二人目の特別報告者、女性初。8人の候補者が選ばれた。

清水ハン栄治さん制作のアニメ映画 TRUE NORTHが

アメリカ国務省内部で上映されたというニュース

以下の一文は 今月7月16日(土) 3時13分に清水さん本人が発信されたもので、その後と澤井健二さんから Facebook でシェア(報道)されたものなものです。

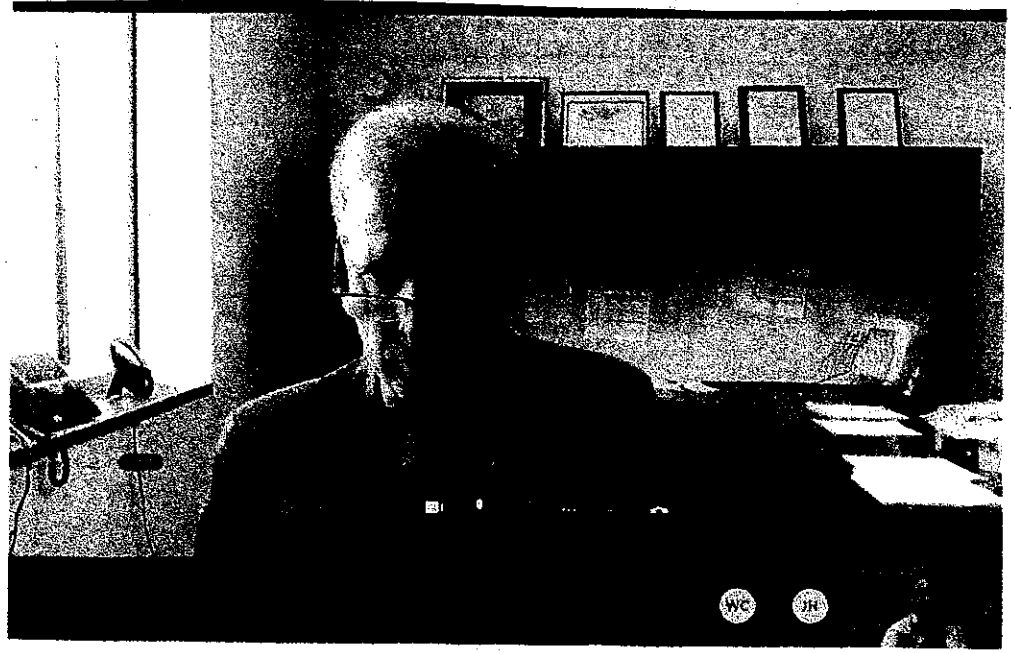
清水ハン 栄治

10時間・⑥

世界の外交の要、アメリカ国務省で「トゥルーノース」のオンライン上映会と講演をしました。この12年間、遺書まで書いた伝えなかった不正義を、実際にアクションを起こせる人々に届けられました。

Online screening of TRUE NORTH and Q&As for The US State Department. The evidence of atrocity that I have been dying to expose for the last 12 years was finally delivered to the most influential group of people in world diplomacy.

編集者(小川)はもう少し詳しい情報が必要と澤井氏に送信したところ、この件についてアメリカでは報道はないとのことでした(7月18日メール)。しかし翌(19日)午前(9時)かでは(花)澤井さんから(国際電報)があり、アメリカ国務省のスポークスマンが「北朝鮮の核兵器よりも恐ろしい北朝鮮の人権抑圧」という表明が18日あったということでした。そのスポークスマン(報道官)はオンラインでのアニメ映画を観たのでした。清水さんの発信には写真が添付されていた。最初見ると、どういう意味の写真かわかりませんでした。今の方角をみると、以下は奥の部屋です。オンラインで観たアメリカ国務省の高官の一人でした。上映後の質疑の映像でした。右下は清水さん。この映画を



TRUE NORTH が6月29日から韓国で一般上映

北朝鮮強制収容所をアニメーションで描いた清水ハム栄治監督制作の TRUE NORTH が先月末から韓国の映画館で一般上映されていることを知った (Remember me の題で)。文在寅政権時代には一般上映されなかったということがわかり、ショックを受けるとともに、今回の一般上映を高く評価し、大いに注目したい。GPF の澤井健二が今回の一般上映に関して韓国の主要メディアの紹介を6本送ってくださった。それを全部読み、メディアによる紹介の概略を読んで、清水ハム栄治氏が韓国社会やマスコミ陣に行ったこの映画を作るに至った動機、この映画で何を訴えたかを改めて確認させられた。

40人の体験者や脱北者の証言をもとに、10年かけて制作

主人公は帰国事業で北に渡った在日朝鮮人のある家族…主人公はヨハンという9歳の少年。父がある日いなくなり、間もなく一家が強制収容所に送られる。ヨハンは自分や家族が生きるために他人を密告して食料を確保したり、収容所内警備員のような役割を果たしてゆく。18歳になり、お母さんの死と遺言を契機に「自分はどんな人間になりたいのか」を考え始め、収容所内で全員が生きていく努力を始める。絶望しかない死の場所、強制収容所の中に希望を作り出し、自分の妹と妹を想う友人を脱出させ、自分は内部で努力し、殺される道を選ぶ。

安明哲、金恵淑氏ら体験者がインタビューされている…日本では体験者の手記は身近にあるが、韓国では原本が新刊書で手に入るか否かわからない。この一般上映を機会に、体験者の手記の再刊、新刊が望まれる。韓国内の体験者の手記の刊行、入手状況に注目しよう。

国内でも TRUE NORTH を観 (Netflix や dvd 購入で)、かつ広げよう!

「フレイム・オブ・ソウル」 (文責 小川暁久)
U-NEXT など有料 (有料)

会員の皆さん、今年度の会費の納入ありがとうございます！
6割の方が、^{まだ}後の方もよろしく!

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 86 2012年8月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

http://nofence.jp/



金与正よ！父親をよく知れ！

去る8月18日、朝鮮労働党副部長の金与正が登場し、韓国の尹錫悦大統領が提唱した、北が核開発を止めるなら経済支援をするという「大胆な構想」を一蹴した。「愚かさの極致」とまで言って、北が核開発によって金一族の体制を守ろうとしているから、金与正が正直なのはわかる。しかし NO FENCE は彼女に次のことを伝えたい。多分知らないであろうから。

2001年5月2日、当時EUの議長だったスウェーデンの首相ヨーラン・ヴァーシオン氏が一泊二日の短い日程で北朝鮮を訪問した。ヴァーシオン首相は議題に入っていなかった北朝鮮の人権問題を昼食会でいきなり指摘した。「核問題が解決しても、人権問題が解決しないと、北は国際社会に迎え入れられない」と。金正日は「OK です。人権問題でEUと対話しましょう。我々の人権観はあなたたちとちがいますが。」と答え、会談後外務大臣姜錫柱に指示を出した。核開発問題で人権問題を隠せと(太永浩『三階書記室の暗号、北朝鮮外交秘録』文芸春秋、152～156頁)。

金与正よ、西側は、当時通訳陣にいた太永浩氏のこの暴露で、あなたの父親金正日の狡猾さを知っている。貴女が核開発を止めないと主張することは、強制収容所を始めとする人権侵害を隠し続けることを意味するのだ。韓国語版『三階書記室の暗号』を繰り返し読んで発言すべきだ。私たちもこの「核で人権問題を隠す」という方針を絶えず頭に入れておくべきだ。今回の貴女の談話・発言に接して、私たちは太永浩氏のこの暴露を思い出した。この本の一番重要な所はこのくだりである。金与正よ！西側をだます父親の汚い手口に恥を知れ！我々もこのくだりを忘れず、絶えず強制収容所問題に思いを致す(文責 小川 晴久)。

四代目報告者エリザベス・サルモンさんの声明

本誌前号で報道した新しい北朝鮮人権状況特別報告者サルモンさんの就任声明が、国連人権理事会ソウル事務所から届きましたので、紹介します。先ず要旨(かなりラブな)を記し、そのあと原文(英文)を付します。

(要旨) 本日(2022, 8, 1)4代目の報告者として働くようにという委任を受けた。光栄に思うと同時に、この任務に私がふさわしいか、身を案じる。私は北朝鮮の市民の方たちへの強い責任と約束の感覚を持って、また朝鮮半島の人権と平和の前進のために、この委任を引き受ける。

前任3人の特別報告者の努力が明らかにした最も大きな困難は、北朝鮮当局または高官との対話のチャンネルが欠けていることである。従って私の最も重要な任務の一つは、北朝鮮政府と意見を交わす機会を切り開くこと、そのための情報を集めることである。国連の他の機関の北朝鮮政府との関係も動員して。

同時に私の任務は犠牲者の人たちへのアプローチにある。何十年もの間、犠牲者たちは常に人権や人道的な努力の焦点でなければならないことを私たちは学んだ。従って私もまだ聞かれていない声に接する機会を持つことに力を入れる。初めての女性の報告者として、北朝鮮の女性と少女たちの困窮と不幸に、国際社会の関心が集まるよう特別の努力を払う。

加えてこの2年半、Covid-19 パンデミックのため、北朝鮮の人権状況には特別な困難が生じている。何十年も続く収容所システムにおける人権状況が現に存在している。この国の人権状況改善のために、新しい道が切り開かれなければならない。それは、北朝鮮政府が建設的な対話の道を開くことや国連の安保理メンバーの彼らの国の平和、安全、人権に関する政策に沿った努力などに依存している。

私は自分の任務を達成するため国際的な人権諸団体との交流を望んでいる。「北朝鮮の人権を守るための仕事によりはっきりと動員さるべき強い手段(方法)は、国際社会の連帯であると、私は強く確信している。」 N.B!

私は前任者3人の集めた貴重な資料を活用する。これらの報告、声明、勧告は、私の今日スタートする仕事のロードマップである。

先ず韓国を訪問し、近いうちに私の全体的な活動計画を建てる。

私はできるだけ早く皆さんの多くと会い、同じ道で働くことことを望んでいる。

(意識者 小川晴久)

Statement by Ms. Elizabeth Salmón, the new UN Special Rapporteur on the situation of human rights in the Democratic People's Republic of Korea

1 August 2022

Today, I assume the UN Human Rights Council's mandate to act as the fourth UN Special Rapporteur on the situation of human rights in the Democratic People's Republic of Korea (DPRK). I am deeply honored and humbled by the trust placed in me to fulfil this highly important and challenging mission. I undertake this mandate with a strong sense of responsibility and commitment towards the citizens of the DPRK and in general to the protection and promotion of human rights and the advancement of peace on the Korean Peninsula.

The efforts made by the three previous Special Rapporteurs have left no doubt that one of the greatest difficulties to improve the human rights situation is the scarcity or outright lack of dialogue channels with DPRK authorities or officials. Therefore, it is one of my top priorities to make the utmost effort to build opportunities and open spaces to exchange views with the Government and also to preserve and multiply the sources of information regarding the different aspects of the human rights situation in the country. These efforts must include inviting the different agencies and mandates of the UN system to engage with my mandate to diversify the opportunities to build a working rapport with the Government.

Notwithstanding this strategic priority, my mandate will remain firmly devoted to a victims-centered approach. In the past decades we have learned that victims must always be the focus of any human rights or humanitarian endeavor. Legitimacy and effectiveness of such endeavors equally depend on that approach. Therefore, my work will be strongly invested in strengthening the opportunities for unheard voices to be listened to and amplified. As the first woman appointed to this mandate, I am determined to dedicate special efforts to bring women's and girls' needs and adversities to the attention of the international community.

Additionally, it is well known that the human rights situation in the DPRK has become more difficult during the past two and a half years due to the severe measures taken to address the Covid-19 pandemic. North Korean people are facing new and more serious hardships. These add to decades-long abuses which must not be neglected, such as the situation in the prisons system. It is urgent to find effective ways to bring relief and humanitarian assistance and dialogue and cooperation to improve the human rights situation to the country. This will depend on the Government opening to a more constructive dialogue and also on the UN Security Council members' approach to their policies regarding peace, security, and human rights.

To make this possible, besides approaching the DPRK's Government and society, I will seek the cooperation of civil society organizations, victims' groups, relevant governments

and other actors who have been engaged in North Korean human rights issues, inviting all of them to join forces with my mandate. I am convinced that international solidarity is a strong resource that should be more decisively mobilized in the task of protecting human rights in North Korea. **N.B!**

I will also consult the invaluable resource of the outstanding work already done by my predecessors and colleagues, former Special Rapporteurs Mr. Vitit Muntarbhorn, Mr. Marzuki Darusman, and Mr. Tomás Ojea Quintana. Their reports, statements and recommendations are already a roadmap for the work that I start today.

I intend to make my first visit to the Republic of Korea as soon as possible and to devise a comprehensive workplan within the next weeks. I am planning to present my first report laying out short-term and mid-term objectives and activities to the General Assembly in October this year.

I am looking forward to meeting with many of you very soon and to working together in the same direction.

END

Ms. Elizabeth Salmón (Peru) is appointed as the first female Special Rapporteur on the situation of human rights in the Democratic People's Republic of Korea by the Human Rights Council on 1 August in 2022. Ms. Salmón is a Professor of International Law at the Faculty of Law of the Pontifical Catholic University of Peru. She is also Executive Director of the Institute for Democracy and Human Rights of the same university (IDEHPUCP). She holds a PhD in International Law from the University of Seville (Spain).

Professor Salmón was a member of the United Nations Human Rights Council Advisory Committee and a Consulting Expert of the Colombian Special Jurisdiction for Peace. She has acted as a consultant to the Ministry of Justice and Ministry of Defense of Peru, the Truth and Reconciliation Commission of Peru, the United Nations and the International Committee of the Red Cross (ICRC). She also participates as a speaker in numerous seminars, conferences and events around the world and she is the author of several publications in Public International Law, International Human Rights Law, International Criminal Law, International Humanitarian Law and Transitional Justice.

Special Rapporteur can be reached at hrc-sr-dprk@un.org

For more information and **media requests** please contact: Ms. Madoka Saji (+82 10-4230 3523 / madoka.saji@un.org)

(編集部より)・上記英文のサーモンさん略歴は訳しませんでした。会報前号参照。

・太永浩著「三階書記室の暗号、北朝鮮外交秘録」(文芸春秋)の該当箇所、重要ですので、最寄りの図書館に注文してお読みください。

・今、尹大日著「北朝鮮・国家安全保衛部」(萩原遼訳、文芸春秋、2003年刊行)を再読しています。次号に内容を重点的に報告する予定です。(小川 晴久)

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 87 2012年10月

T 102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

http://nofence.jp/

北朝鮮、核兵器使用等の法制化

北朝鮮は建国記念日の9月9日、その使用を具体化した核政策を法制化した。金正恩は今後100年制裁が続いても、核兵器は絶対に放棄しないと最高人民会議で強調した。

北朝鮮ミサイル多発、近く核実験再開か

先日(10月4日)北朝鮮は日本の上空を超えるミサイルを発射して、驚かせたが、9月25日から10月9日までの軍事訓練で12発のミサイルを発射した。訓練の主体は「戦術核運用部隊」で米国などに対抗する「核攻撃の訓練」であると朝鮮中央通信は10日報道している。近く2017年以來の核実験が予想されているが、核実験といえば、会寧(ヘリョン)22号強制収容所(管理所)が閉鎖された理由がその囚人たちが大量に核実験場作りに動員され、被爆し死亡したことが主な原因であったという脱北者の証言が思い出される。北朝鮮当局には放射能被害に対する知識や対策がなく、今後も強制収容所の囚人たちを動員するであろう。北の核実験報道がなされる時、このような酷い人権侵害が伴うことを忘れてはならない。

久しぶりに日赤に要請

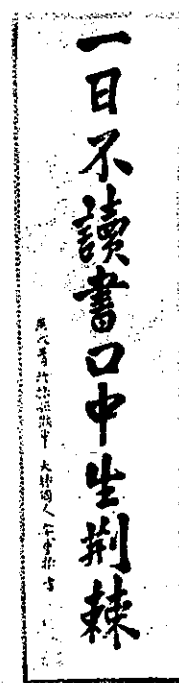
去る10月4日「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」の代表佐伯浩明^氏らと日赤に出向き、60年前に日本から北朝鮮に渡った9万3千人余の帰国者からの日赤に対する手紙に関する実態を聞いた。事前に佐伯代表が日赤側に出向き、質問事項を手渡して、この会談が実現した。私(小川)は守る会の名誉代表でもあり、NO FENCE

の代表として同席した。日赤側は国際部の大山啓都企画課長ほか職員2名が対応した。そこでわかったことは、2000年以降毎年100～200通の手紙が北から日赤に届いており(2020年以後はゼロ)、日本の親族探しや文通の依頼のいわゆる安否調査の手紙である。最近の実態は親族が判明し北に伝えることに同意した件は7件、不明・拒否者は36件、他は死亡ということで、お互いに世代が交代しており、北の家族と連絡を取りたくない日本の親族が多いことが分かった。朝鮮赤十字会(北朝鮮の赤十字社)は国際赤十字(192か国加盟)に加盟していて、60年前の北朝鮮への帰国事業の北朝鮮側の当事者でもあるので、日赤と国際赤十字とパイプをもつ貴重な窓口である。たとへ北朝鮮の国家保衛部の監督下にあっても、日赤を介したこの窓口を守る会としても、NO FENCE としても大事にしなければならないということ、改めて認識して日赤を後にした。もし会員の皆さんの周りに北に渡った帰国者の家族が居られたら、北の親族との文通如何を尋ね、日本の親族を支援する輪を作ることに努力して頂ければ、幸いです。このようにお願いする私から実行しなければいけないのですが。

10月26日がやってくる——安重根義挙の日

1909年10月26日はハルピン駅頭で伊藤博文が安重根に射殺された日である。私(小川)は今、安重根の評伝を作る作業に協力してしていますが、生前の安重根はとても優秀な独立運動家であったことを再認識させられています。今年の10月26日を前にして、昨年5月にある脱北者が語ってくれたことを、思い出します。昨年5月北朝鮮の平壤の金日成広場に「第二の安重根よ出でよ」と大書した横断幕が張り出されたという証言です。すぐに撤去されますが、当局は実行者を探し当てていないということでした。北朝鮮では安重根の映画も作られたと言われますから、北朝鮮の民衆は安重根のことはよく知っているようです。この横断幕は、北の内部に反体制派がいることを如実に示します。安重根は国民の団結を何よりも願っていました。彼は旅順の獄中で多くの揮毫を頼まれ、たくさんの書を残しますが、二つだけ紹介します。最初はとても有名な言葉。

一日不讀書 口中生荊棘 一日讀書しないと口中に荊棘(いばら)が生ずる
 澹泊明志 寧靜致遠 淡泊は明志を作り、寧靜(安らか)にして遠きに至る
 後者は諸葛孔明が息子を戒めた書に出る言葉です。安重根は勉強家でした。



原六吉 北朝鮮脱北者 大韓獨人 安重根 書す



庚戌三月 北朝鮮脱北者 大韓獨人 安重根 書す

『百年の魂 忠魂 安重根』(백암 2016年刊)より

『北朝鮮・国家安全保衛部』(尹大日著)より抜粋

前号の会報の末尾で予告しましたように、2003年に文芸春秋から翻訳出版された本書から必要と思われるところを抜き出し、紹介します。 *現在は国家保衛省と改題。

〈金日成死去以後、国家安全保衛部に新しく下達された命令〉

- ① 幹部、特に責任幹部たちの思想動向と動きを毎日掌握すること。
- ② インテリ、科学者集団と大学生、文化・芸術部門、出版・報道部門の幹部や働き手に対する情報事業を強化すること。
- ③ 発生事件(落書き、ピラ事件を意味する)の未然防止と未解決事件の捜査、一号影像作品(金日成の写真や肖像画)の破損、汚損事件の捜査に力を集中すること。
- ④ 住民に対する情報事業(事業とは監視を意味する)をより強化すること。
- ⑤ 緊張した情勢に対処して、戦争の準備を万全に整えること。
 - ・ 有事に備え十号対象(戦争勃発時に処刑する対象とその家族。一つの郡に家族を含め四十人あまりいるから、北朝鮮全土の二百あまりの市、郡を合わせれば、少なくとも総勢八千人あまりが十号対象者となる)たちを再分類、選定し、処理(処刑)する場所と方法などを責任幹部が直接確認し、計画を作成すること。
- ⑥ 中国と隣接した国境を徹底的に封鎖すること。(以上49~52頁)

〈統制の手段と方法〉 108頁~114頁

「いま地球上には二百余の国が存在する。しかし、北朝鮮ほど住民に対する監視と統制が徹底して組織化された国はおそらくないであろう。北朝鮮は住民への洗脳教育で、夫婦や兄弟、子供たちや同僚が血肉と友情の関係を越えて、ひたすら金父子に忠誠を尽すよう脅しと欺しで、人々の思想と感情を支配している。これこそが北朝鮮体制維持の基礎といえる。」

「北の社会の住民監視と統制は、すべて金父子の長期政権を目的にしたものである。北の執権者たちが住民を一つの思想にまとめ上げる究極の目的は、国の統一実現と社会主義、共産主義を建設し、すべての人々が幸せに暮らせる社会を作るためだと宣伝しているが、これは朝鮮半島の永遠の支配者として生き残ろうとする、金父子の野望を覆い隠す嘘の宣伝にすぎない。」

「北は金父子の世襲体制を永久に続けようとの目的から、歴史を歪曲し、理屈にもならない幼稚な偶像化宣伝で住民を欺瞞する一方、いろいろな統制機構と権力を動員し、北朝鮮を人権不毛地帯に変え、住民をこの世でいちばん貧しく立ち遅れた無知蒙昧な人々に変えてしまった。」

- ① 各個人が所属する組織を通じた統制

「北朝鮮社会の人々は、誰もが組織に所属し、組織の統制を受けない人は一人

もない。党員は党組織に、労働者は職業同盟の組織に、農民は農業勤労者同盟、女性は女性同盟、青年は青年同盟の組織に、生徒は少年団組織に所属し、常に自らが属する組織の統制と監視の中で生活している。

党組織をはじめすべての組織は、毎週土曜日にメンバーを集めて、週間の組織生活の状況を総括する。それは、自己批判と相互批判の雰囲気の中で進め、政治学習や講演会、学習に対する総括も行なう。こうして彼らの忠誠心を誘導する一方、組織生活に不誠実だったり組織の統制に非協力的な人には、大論争という闘争舞台にあげて集中攻撃し、組織に刃向かえないように脅している。だから、北朝鮮の人々は、自分の所属組織をいちばん恐がっているばかりか、その組織に自分はもちろんのこと家族や親戚の運命までかかっていると考えるのである。

② 行政機関と工場、企業所による統制

上記①の組織が「人々の精神生活の領域を統制し支配する組織であるならば、行政機関、工場、企業所などは、行政機関を動員して党の指示どおりに人々の物質生活の領域を支配する。」

「工場、企業所の労働者たちが理由なく欠勤する場合は、賃金と食料供給を差引き、経済的な不利益を与える。また、病院で入院治療を受ける場合も診断書を添付しないと、食糧と賃金が支給されないよう徹底して統制する。すべての住民が旅行や出張で他の地域へ行く場合は、必ず該当地域の人民保安省(警察署)で旅行事実の確認を受けさせるなど、その動向を常に掌握している。」

③ 警察機関を通じた統制と監視

「北の人民保安省は住民の中に「安全小組」という組織を作り、その中に多くの密偵たちを通してさまざまな情報や個人の私生活の資料までも収集している。」

④ 保衛部の住民監視手段と方法

「住民を統制、管理し、政治犯の処罰のために、国家安全保衛部には現在三万余名の精鋭要員が勤務している。国家安全保衛部は、中央から道、市、郡、里に至るまで、整然とした機構体制をそなえ、住民監視と統制を強化している。保衛部が住民を監視する基本手段は、秘密裏に採用した情報員(スパイ)たちであり、北にはこの種の雇われ情報員たちが無数にいる。

保衛部の要員は、一人当たり五十名の情報員を秘密裏に採用し、その秘密情報員は一人当たり二十名の住民を監視していて、一単位ごとの要員は、結局、千人余りの住民を情報員を通して監視、統制していることになる。北では一般の住民の非合法のデモや集会は許されないから、これに類似した動きは情報員を通して即刻保衛部に報告され鎮圧されている。

北朝鮮憲法は、公民たちの自由な言論やデモ、集会、結社の自由を保障すると書いているが、宣伝に過ぎない。」

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 88 2012年11月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203
nofenceinfo@gmail.com
<http://nofence.jp/>



耀徳(ヨドック)15号収容所の解体と

化城(ファソン)16号収容所の拡大

——11月5日姜哲煥氏オンライン講演報告——

去る11月5日(土)オンラインでヨドック収容所体験者姜哲煥氏が今年の秋にヨドック収容所が解体されたことを、人工衛星写真で確認したことを詳しく報告してくれた。講演の後半はその囚人たちは核実験場に隣接する化城16号収容所に移動させられているのではないかと推察した。終始グーグルアースの人工衛星写真を使っての説明であったので、以下私(小川)の当日のメモによる骨子だけ記したい。

〈耀徳収容所の解体〉 姜哲煥氏は人工衛星写真で常に北朝鮮の収容所を観察しているという。会寧(フェリョン)22号収容所の解体は2012年から始まったが、耀徳15号収容所の解体も2014年から始まった。しかし一時中断し、その後亦開始された。2017年の耀徳収容所の衛星写真とこの秋のそれとを比較すると、耀徳収容所の解体は完了したという。

先ず正門も、鉄条網も、詰め所もなくなっている。収容所の学校もない。最盛時に5千人もいた在日僑胞(在日朝鮮人)の村もなくなっている。旧邑里、立石里、大淑里の村もなくなっている。正門付近にあった職員の住宅もない。新しい建物はあるが、軍事目的のものか否か、わからない。警備兵の村はそのまま残っている。証拠隠滅のための解体である。

大淑里
|
立石里
|
龍坪里
|
旧邑里

〈化城収容所の拡大〉では耀徳収容所の収容者は、どこに行ったのか？ 姜哲煥氏は豊溪里(ブンゲリ)核実験場近くにある化城16号収容所に移送されたのではないかと推察している。前例があるからである。会寧22号収容所が解体されたとき、大部分の収容者は化城収容所に送られているからである。化城収容所の体験者から姜哲煥氏が最近聞いた証言では、化城収容所で4万7千人もの収容者が死んでいるという。質疑のときその根拠はと問われ、姜氏は安明哲氏の証言を紹介した。会寧収容所の元警備兵安明哲氏は、会寧収容所の囚人2万名(掘削技術のある)が万塔山(マンタツサン)近くの土木工事に動員され、戻らなかったことがあった、彼が韓国に亡命したのち、それが豊溪里の核実験場作りの動員であったことを知ったという。4万7千人のうち、2万人が会寧からの囚人であったと考えることが出来る。化城収容所は今や耀徳収容所の三倍ほどの大きさであるという。北朝鮮強制収容所で今や最大の収容所であるという。当日会場からの質問で、拡大された化城収容所は、北緯何度から東経何度までのどこの位置に属するかが問われたが、当日は明確な答えはなかった。姜哲煥氏は近く報告書を作成すると言っているのだから、そのときを期待したい。只四つの指標はある。万塔山、冠帽山(2171m)、豊溪里、化城(地名)。山から出来る三本の溪谷に沿って収容者たちは住まわされ、東海岸近くまで収容所は拡大しているようだ。収容所の領域は山の尾根づたいであるという。北朝鮮当局はミサイル・核開発に集中している。近く5回目の核実験も予想されている。放射能被害を防ぐ防御服は一着10万ドルという。核実験場の核汚染に対し、殺してもいい収容所の囚人を大量に使う必要から、今化城収容所に耀徳収容所の囚人も集められている。化城収容所は今10万人ぐらまで収容しているのではないかと姜氏は言う。国際社会は化城収容所に今大いに関心を集め、注目すべきであると、姜氏は講演を結んだ。〈質疑から〉質疑の一部はすでに示した。参加したマスコミ陣は、ミサイル・核実験と北の人権侵害は一般に別々に理解されているが、今日の話は両者が一つになっているという衝撃的な話だと感想を述べた。強制収容所をアニメ化した『True North』の作者清水ハン栄治氏は、『True North』の終わり方を核開発研究所で締めるアイデアも考えていたが、それで締めればよかったと大変残念がっていた。(小川按ずるに：そのアイデアで終わる改訂版を作ればよいのでは？) 谷川透氏からは来年当初と言わず、早く報告書を出し、世界に発信してほしいという強い要望が出された。

国連第3委員会、18年連続で北朝鮮人権改善要求決議採択

11月16日 UN 第3委員会は18年連続で対北朝鮮人権決議を採択。来月の総会で決議される模様。韓国は4年ぶりに共同提案国に参加。今回も EU が原案立案。

(参考資料)

人民北朝鮮の弾道ミサイル発射を非難する声明

令和4(2022)年11月9日、北朝鮮が今年に入って32回目となる弾道ミサイルを発射し、そのミサイルは、朝鮮半島東付近の日本のEEZ(排他的経済水域)の外に落下したものと防衛省が発表している。度重なる弾道ミサイルの発射は、我が国及び国際社会の平和と安全を脅かすものであり断じて容認することはできない。加えて、これら一連のミサイル発射は平成14年9月17日の日朝平壤宣言に明確に違反しており、この点についても我々は嚴重に抗議し、強く非難したい。

父親の金正日時代に発射した弾道ミサイルが17年間で16発であったことから、息子の金正恩総書記が発射した弾道ミサイルの数は異常に多く、その狙いは何か。我々は、韓国で5年ぶりに保守政権が誕生したこと、米韓合同軍事演習の実施、日米間の共同訓練の開催による3か国の結束強化が図られていることへの政治的メッセージだと捉えている。

ところが、この弾道ミサイルを1回発射する費用は、アメリカのシンクタンク「ランド研究所」の上級防衛アナリスト、ブルース・ベネット氏の調査として、短距離ミサイルで300万ドル(約3億6000万円)、長距離ミサイルで1000万ドル(約12億円)にのぼると試算している。「北朝鮮で家族4人が1日3食を食べ、衣食住に困らない生活をするためには毎月1万2000円ほどあれば十分」と言われていることから、北朝鮮人民の生活と人権を犠牲にした弾道ミサイル発射と非難せざるを得ない。

北朝鮮がどれだけの数の弾道ミサイルを発射しようとも、それによって北朝鮮の金正恩体制が持続できるという保証は何もなく、北朝鮮人民の生活と人権が守られる保証もない。金正恩体制持続の執念に駆られて弾道ミサイルを頻繁に発射することを止め、ミサイル発射にかかる費用を国民生活と基本的人権を保障するために投入することの方が、遥かに北朝鮮人民が幸せになる近道だと進言したい。

折しも、本年12月4日～10日までは、「世界人権週間」として世界中で人権尊重に関する様々な取り組みが予定されている。独裁者と一部の人間だけが贅沢をするために、大多数の国民の生活と人権が蹂躪されている北朝鮮は世界中から非難されている。

弾道ミサイルに投入するお金を、北朝鮮人民の生活と人権を守るために振り向け、北朝鮮人民の自由と人権が保障される国家となるために活動を強化していくことを、我々はここに、改めて決意するものである。

令和4(2022)年11月14日

北朝鮮人権人道ネットワーク

上記の声明文を紹介したのは、ミサイルの費用が明記されていたからでした。ネットで調べますとマスコミ各社が話題にしていることがわかりました。

朝日新聞は去る6月10日の記事で、北朝鮮が今年1月から6月までに発射したミサイル33発の費用は総額で4億~6.5億ドル(約531億~871億円)に上ると韓国の政府系シンクタンク「韓国研究院」の試算を報道した。この総額は北朝鮮の米価やトウモロコシの価格に照らせば、51万~84万トンの食糧に相当すると。

*今朝(11月18日)米のスザンナ・ショルテさんから以下のような報告が届きました。主要な所を原文で貼り付けます。中国にとらわれている北朝鮮脱北者が韓国に亡命できるように求めた「救おう北朝鮮亡命者の日」(9月下旬、ソウル)の行事に、全世界18か国、55の都市で参加者があったという報告です。末尾のvigilantの意味は「寝ずの番をする」の意で在中の脱北者が無事に韓国にたどり着けるように注意し続ける必要があるという意味の様です。

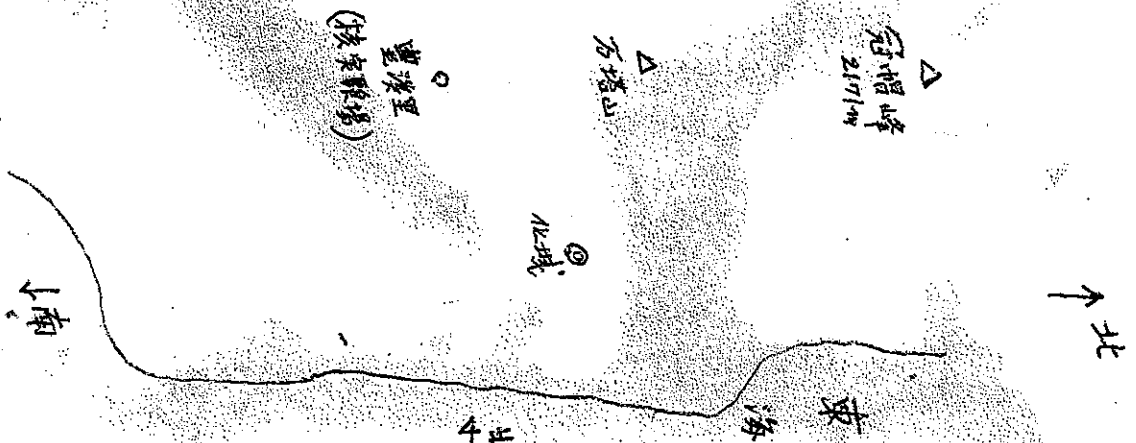
Dear Friends:

I am pleased to attach the report for this year's **Save North Korean Refugees Day** to cite the many people around the world who participated in taking action that day!

In writing my introductory note, I could not fully capture the joy and gratefulness on the faces of the North Korean escapees and South Korean human rights activists protesting in Seoul when we told them about the people listed in this report who were taking action in **18 countries and 55 cities**. It meant so much to them to know folks from all over the world were joining them in this advocacy to save the lives of these refugees currently detained in China. We were also able to share that **22 former US government officials** joined a private advocacy appeal to the Republic of Korea to show strong bipartisan support here for the South Koreans on this issue.

We had more cities and countries involved than ever before because people like you were willing to act.

We need to remain vigilant in this call that all the refugees currently detained in China be allowed safe passage to the Republic of Korea and other many nations willing to accept them.



北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 87 2023年12月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

http://nofence.jp/

核・ミサイル開発の裏で進む

北朝鮮の絶糧世帯＝家族丸ごと餓死の現場

NO FENCE 会員 山元泰生

北朝鮮では巨額の資金を投じた核・ミサイル開発が進められるなかで、末端の住民は食糧難による生活困窮に喘いでいるという。

北朝鮮の食糧危機をいち早く公にしたのは、実は米国の中央情報局（CIA）だった。CIAは今年5月、北朝鮮全土の様子を衛星で撮影した何万枚という写真を詳細に分析し、国際社会に異例の警告を発している――

「北朝鮮住民の多くは極めて低水準の食糧消費と劣悪な栄養摂取問題に見舞われている。衛星データでは、北朝鮮の全域が干ばつを示す赤黒色で表示されており、不足している食糧の規模は、年間の2～3か月分に当たる86万トン前後と推定される。これらの不足分を輸入や支援で賄えなければ、一般住民は時を待たずに食を絶たれ、極めて重大かつ困難な状況に直面することになるだろう」（報告書「ザ・ワールド・ファクトブック」）

他方、韓国メディアの指摘によれば、北朝鮮では特に今年、あまり前例のない日照りと豪雨などの自然災害に襲われた。加えて、新型コロナウイルスの蔓延による住民の厳しい移動制限や農業資材の減少、肥料不足などが重なった。その結果、米、麦、トウモロコシ、じゃがいも、大豆などほとんどすべての収穫が大幅にダウンした。例えば小麦に至っては、例年の1割くらいしか収穫できなかったという。

そのため各地の住民は、わずかな貯えや配給だけでなくヤミで手に入れた穀物や盗品から野草、川魚、鳥類、昆虫まで食い尽くした。厳しい飢えに苦しめられた挙句、

「絶糧世帯」に追い込まれた。

ここでいう「絶糧世帯」とは、とにかく食糧が全くなくなって、そのほとんどが家族ぐるみ餓死するほかない人びとのことである。

米政府系ラジオ『自由アジア』(RFA)をはじめ、『デイリーNK』や『アジアプレス・インターナショナル』など、米韓・日本のメディアによれば――

*咸鏡北道・会寧市では、複数の住民の住宅の煙突から夕方になっても煙が出なくなったので、市安全部(警察)で調べたところ、どの家でも家族もろともガリガリに痩せて死亡していた。また、道内の茂山郡では、郡内最大の鉄鉾山ですら1か月に5日～7日分のトウモロコシしか支給されなくなって、飢えによる体力の衰えや病気のため、まともに出勤できる労働者は半分くらいに減ってしまった。

*两江道の恵山市では、市内のゴミ捨て場などでジャガイモの皮や食べカスを漁る者が増えている。また同市では、それまで密輸などにより食いつないでいたはずの住民10人ほどが行方不明になり、地元の安全部(警察)で探したところ、山奥の洞窟で全員が枯れた野草を握るなどして重なり合って死んでいた。

*米どころとして知られる平安南道の文徳郡や黄海南道の甕津郡では、上納や泥棒の増加により農家の多くで食糧の貯えが底をつき、各地で10世帯中2～3世帯で農民の餓死者が頻発している。いまや、まともな体力で農作業に従事することができる者は、農民の半数近くに減ってしまった。

*首都・平壤近郊でも、「飢えた兵士たち」が農家を襲う事件が頻発。しばしば農民とのあいだの乱闘＝殺傷事件まで引き起こされているため、農民たちは備蓄分を管理所に預けたのだが、それがまた管理人に食われたり横流しされたりして、倉庫から消えてしまった。

こうした悲惨な事例は枚挙にいとまがない。なぜこんなことになってしまったのだろうか。それぞれの原因を辿れば、単に自然災害のせいだけではなからう。

現地からの情報や事情通の話によれば、北朝鮮の金正恩政権は、特に今年春ころから増産の目標を立てて農業生産の向上に努めるよう号令をかけてきた。ところが政権の施策として実際に行なわれたのは、①農村での収穫物の窃盗などを絶つための警備の強化、②農民が勝手に開拓した山間傾斜地の没収、③協同農場や農民個人による横流しや分売の徹底取り締まり、など上からの強権による統制を重ねるだけだった。

例えば北部・两江道では、「肥料にする人糞を盗まれてはならない」というわけで、村の共同便所に終日見張りを立て、怪しげな者が近づいてくると、鉈やこん棒を振りかざして追い払ったという。

こうして北朝鮮の国家社会は、食糧難→統制強化→絶糧世帯の増加→統制強化の悪循環を招いてしまったのである。

しかも機を一にして蔓延した新型コロナ対策のため、広く住民に対し執拗なほどの外出制限や接触禁止を強要してきた。だから死者が出て、周りの者は一家がコロナ

で死んだのか飢えて死んだのか分からないのが実情だったのだ。

一部の事情通のあいだには、「だからこそ支援や貿易でカバーしなければならない」という見解もある。だが北朝鮮は、国連など国際社会からの支援に対して、核・ミサイル開発を進める馬鹿げたプライドからこれを拒否し続けている。たまに中国から輸入される食糧類は住民たちが指をくわえて見ているなかで、「金一族と支配層の住む」首都・平壤へ運び込まれるだけである。

とにかくこの国の人命・人権軽視ぶりは、間違いなく世界に例がない。

ソウル在住のある脱北者の証言によれば、北朝鮮では住民が飢えや病気で死亡すると、遺体は当局により郊外のゴミ捨て場のような「共同焼却場」で焼かれるが、骨の一部が遺族に返されることもある。遺族がその詳しい死因を尋ねると、当局者に「うるさい！死んだから死んだんだ！骨を返されただけでもありがたいと思え！」と怒鳴りまくられるのだそうだ。

こんなありさまだから、社会の末端にいる住民が家族ぐるみで飢え死にしても、誰にも苦情の言いようがなく、すぐに忘れられてしまっている。これもまた、この国でしか考えられない危険な社会の病理と言えようが、今のところこうした惨状を救済するすべはない。(2022, 11.24)

国連安保理は北朝鮮人権問題討議を公開にせよ！ 12月10日、31か国が共同声明

12月10日毎日新聞(隅俊之記者)の報道によれば、3年続きで、今年も国連安保理は12月9日北朝鮮の人権状況を非公開で討議した。安保理は2014年から2017年まで公開で行ったが、2018年と19年は行われず、20年と21年は議論は非公開であった。

そこで今年はヒューマンライツウォッチ(HRW)などが動いて、以前のように公開で行われるように要請を行った。NO FENCEもこの要請に参加した。その結果がどうであったか気になっていたが、上記の毎日新聞などの報道で、今年も非公開で行われたことが分かった。しかし12月10日の世界人権デーの日に、米英仏などの理事国と日韓を含めた31か国が共同声明を発表し、来年の討議は公開にすることを含んだ共同声明を発表したという。

上記毎日新聞の報道によれば、共同声明は「(北朝鮮は)10万人以上を政治犯収容所に拘束し、人々は拷問、強制労働、処刑、飢餓、ジェンダーに基づく暴力などの虐待を受けている」と指摘した。「国民は深刻な経済的困難と栄養失調に苦しんでいるにもかかわらず、抑圧的な政治情勢が、資金や人員を兵器開発に回す強制的な統治体制を可能にしている」と批判した。公開にせよという要請は去年は7か国であったが、今年はその4倍以上の31か国の要請になったのは成果の一つである。公開から非公開になったのは常任理事国の中国の拒否権があったからと言われる。

北韓人權市民連合(韓国)ニューズレター(金英子さん)より

北韓難民に希望を…

こんにちは

12月に入って何日もひどく寒かったのに、今日はとても温かかったので、昼食の後、事務室の近くを散策しました。北の地はより寒さが厳しいから、北韓住民は向こう1年どのように過ごすのか心配です。

何日か前、新聞に出た驚愕すべき記事をお読みになったと思います。

「北、韓国映画・ドラマを流布した10代の青少年たちを公開処刑」

「韓国コンテンツ流布罪銃殺…北韓は今も外部世界と徹底的に断絶」

何年か前、市民連合が救出した脱北民中にも南韓映画を観た若者たちがいたが、自分の周りで南韓映画を観て、捕まえられていくのを見て、自分も捕まるかと考え、脱北することになったと言いました。この時助けを求めてきた脱北民が送ってきた内容の一部です。

「友達たちと好奇心から韓国映画を観て驚いた。お前たちと中国に行き、金を稼ぎに行こうと誘われました。私は中国には行かないと言ったのですが、行かないのならお前たちが韓国の映画を観たことを保衛部に言うぞと脅迫しました。」

「母親が生活が苦しいので密輸入品を売り与える仕事をしていたが、沢山金が稼げると韓国映画 CD を何個か売って逮捕され、教化所(刑務所)10年の判決を受け、8年目に死んで出てきました。」

全世界が皆観て、楽しんでいる BTS(防弾少年団、韓国の音楽グループ—訳者注)音楽をいつの日か北韓の若者たちが思う存分享受できる日が来るでしょう。一日も早くそういう日が来ることを願います。

中国に隠れて生きている脱北民たち支援と感謝のメッセージ

去る11月末、230万ウォンを送り、225名の脱北民に生活費、通信費などを支援し、感謝のメッセージもいただきました。

「苦しいときに配慮金を多く受け取り、子供たちの間食と牛乳を買うことが出来て本当に助かります。沢山感謝して生きています。」

「いつもいつも私たち同胞のためにして下さる愛の恩恵に本当に感謝します。」

「異郷暮らしが手に余り、絶望の身振りの中でこの命を維持している私に、力と勇気をお与え下さり、本当に感謝です。」

後援者の皆様、本当に有難く、感謝いたします

中国は今も北韓難民の移動がとても難しいです。いつかはきっと道が開けるでしょう。その時を待って準備しています。中国で辛くい毎日を送っている脱北民に対し常に支援をして下さる後援者の皆様に感謝を申し上げます。向寒の折の風邪にお気を付けください。感謝の言葉を重ねて申し上げます。2022年12月7日 金英子 拝上